

(様式 1)

令和 7 年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立桜堤中学校
校長名	吉岡 大司

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
・昨年度に対して標準スコアが 2 年生の国語、数学、理科があがった。そして 3 年生でも数学、理科があがった。 ・1 年の英語は全国、目標値を上回る結果となった。2 年の社会、3 年国語も目標値に近い値となった。	・1 年の英語以外全国平均を上回るものはなかった。とくに三年生の結果状況が芳しくなく、標準スコアが一番高いもので 48.5 (国語)、一番低いもので 46.3 (社会) となった。 ・経年で見たときに学力を維持または上昇させるためにはどうするかが課題となる。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
・中間や期末テストに対して学校をあげて計画をするようにはたらきかけているため、勉強に対して計画を立てて勉強しているかの項目に対して、全国平均は肯定的な意見が 50 % 未満に対し、本校は 55 % を超える結果となった。	①「学校の授業以外で週何日勉強しているか」項目に対し「ほぼ毎日」「週 4 ～ 5 日」の割合が全国平均より 10 % 以上回る結果となった。 ②「学校の授業の予習、復習をしていますか」の項目に対し、全国平均は「だいたいしている」だが本校の平均はあまりしていないが 40 % を超える結果となった。 ③「1 日どれくらいの時間 SNS やゲームを使用しますか」の項目では全国平均「2 時間以上」を本校は 1 時間以上上回る結果となった。 これらの結果から家庭学習が定着しておらず学力向上の妨げになる現状があった。それをどう改善するかが課題である。

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
・若手の先生が増えていく中、管理職の先生が若手の授業をみるなど OJT が受けやすい状況となっている。そのため授業に対するベテランとの差がないように努力をしている。 ・5 教科の学力コンテストを経年でやった結果、慣例になりつつあるため、生徒もテストの練習になった。	・多目的スペース等に自主学習用にプリントが置いてある。しかし、テスト前以外では活用する生徒が少ない。 ・ふりかえりシートの活用をしているが、そのときの単元は理解できるが、単元のつながりを意識できずに問題でつまづくことが多い。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 桜堤中学学習スタンダードの徹底を図り、教師の授業力を育み、授業改善を推進する

生徒の基礎学力の定着には、授業規律の徹底や教師の授業力向上、授業改善が必須である、全教科の授業の導入時に「学習のねらい」を明示したり、授業終わりには、学習のねらいが達成できたかなどの生徒のアウトプットの場「学習のまとめ」を設定したりすることの徹底を図る。

具体的な授業改善

- (1) 授業の準備として、教材研究を十分行った上で実施する。
- (2) 授業のはじめに、本時の「めあて」を板書し、明示する。
*課題を把握するなどの「考える」時間の確保や前時の復習や既習事項の確実な実行。
- (3) 授業の展開（学習方法の工夫）
*自力解決（自分なりの考えで解決をさせる。）
*学び合い（ペアーワークやグループ学習等の導入）
- (4) まとめの時間の確保
*授業の中間、25分を意識した授業計画をすることで、まとめを確実に実施する。
*授業の始まりと終わりの時間を守り、1単位時間50分の学習時間の確保。
- (5) 少人数習熟度別指導などを活用（多様な授業形態やICT機器等の活用）
- (6) 次の授業準備（机上に、教科書やノート等の学習道具が揃える）など、生徒自らがチェックできる取組やチャイム着席の徹底を図り、生徒が主体的に取り組む姿勢を育む。

(2) 紙媒体の教材やデジタルを活用した学習を併合した学習指導

本校の学力向上の喫緊の課題は、DE層の底上げである。デジタルを活用した学習（ロイロノート等）やAI教材を活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に取り組む必要がある。

デジタル学習を活用した授業や家庭学習、定期考査前の朝学習では、各教科担当が、定期考査対策用の問題を作成するなどして、ある一定期間、デジタル学習を活用した計画を推進する。

さらに、ドリル的な紙媒体の教材を繰り返し、毎時間、適量を反復的に行わせることで、生徒が苦手な問題に対して、つまずかずに、基礎を固められるよう指導の一層の徹底を図る。

このことで、DE層が主体的、自律的な学習ができ、生徒自ら効果的な定着方法を理解し、学習が継続できるようにする。そして、ABC層の生徒に対しても、一層の学習の習熟度を深めさせるため、「ふりかえりシート」や「ミライシード」、「理科社会のデータベース」を活用して、基礎基本の定着や応用力を身に付けさせるための基礎とする。

令和5年度より、全校生徒のタブレット端末機に、スケジュール管理アプリのジョルテをインストールし、活用してみたが、その成果がでた生徒とそうでない生徒の二極化であったため、本校独自のエクセルファイルで作成した日課表とその紙媒体を、生徒が選択して提出させることで、「自ら学び、考え行動し続ける力」や「自己調整力」を育成する。

このことで、書く／記録する習慣や時間、日時を意識する習慣、毎日を振り返る習慣を身に付けさせ、毎日、ロイロノートで担任へ提出させ、生徒の生活リズムを確認し、生徒に適宜なアドバイスやフィードバックを行う取組を行う。

《実施時期》

- (1) つまずきのある（C層、D層）生徒への取組強化として、振り返り強化期間の設定
「ふりかえりシート」や「ミライシード」等活用する。
Ⅰ期 9月1日～10月8日 Ⅱ期 1月13日～1月16日
- (2) 学力向上委員会の教員が中心となり、夏休み補習教室や前期中間考査修了後、6月下旬より毎週、学力補習教室（数学・英語）等の企画・運営を提案させ、全学年で実施する。
- (3) 令和8年1月から令和8年3月まで、当該学年の振り返りを実施（全学年実施）
SSSに冬休み前にふりかえりシートや学力調査等の問題を印刷するなどして準備させ、テストや問題に慣れることを定着させ、「できる」「分かる」までの学びを繰り返す。

(3) 校内教職員研修を充実させた取組

研究主任と学力向上委員会を中心に、DE層の5教科の底上げに取り組む。

特に、「教科横断型 コラボ授業」を実践し、主題は、「確かな学力を定着させる教科横断型コラボ授業を通して、生徒の自己肯定感を高める」とし、授業開発等の校内研修を継続して、推進する

【令和6年度】

令和6年 7月10日(水)	「横断型授業づくりとは」 基調講演 「学習形態4人組」 千葉大学 松井 聡 教授 研究授業 9教科で4人組 授業実践 成果と課題、次年度計画
令和6年 9月25日(水)	
令和6年10月 1日(火)～	
令和7年 1月15日(水)	

【令和7年度】 ※1年目の成果を踏まえる。

令和7年 7月 2日(水)	教職員へ校内研修概要説明 どの教科とコラボするか調査、 同僚性に関するアンケート実施
令和7年 7月16日(水)	コラボ教科を決定
令和7年 9月11日(木)	基調講演(教科横断型 コラボ授業)
令和7年10月29日(水)	連携する教科と教科横断型コラボ授業の準備、作成
令和7年11月 5日(水)	教科横断型コラボ授業の実施(9教科)
令和7年11月12日(水)	同僚性に関するアンケート実施
令和8年 1月14日(水)	成果と課題、次年度計画

(4) 各種検定を推奨し、タイピング強化週間や5教科「コンテスト」の実施

生徒に、各種検定(漢検・英検・数検)を積極的に受検するよう、声かけや学習支援を行うことで、家庭学習や自学自習の機会を設定する。

朝学習(毎週火曜日～金曜日の8:20～8:30)を活用した令和4年度より、実施しているタイピング強化週間(年2回検定)や5教科「コンテスト」を計画的に実施する。

さらに、朝読書を、計画的に実施することで、授業に対する構えや理解力の向上を図る。

3 「令和8年度 墨田区学習状況調査」における目標

(1)

- 各教科の授業で「ふりかえりシート」や「ミライシード」を活用し、目標値よりも低い内容項目の復習を行い、まずは、全国平均より、1以上上げる。

(2)

- 各教科の授業や自宅学習において、繰り返し学習を行い、基礎学力の定着を図り、DE層をBC層引き上げる。特に、D層からC層、C層からB層へ引き上げる。DE層の割合を5%減らす。